



## 内モンゴルおよびモンゴル国における乳酒をめぐる 生産・流通・消費

著者	尾崎 孝宏, 森永 由紀
雑誌名	東北アジア研究センター叢書
号	58
ページ	61-97
発行年	2016-12-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00065114">http://hdl.handle.net/10097/00065114</a>

---

---

## 内モンゴルおよびモンゴル国における 乳酒をめぐる生産・流通・消費

尾崎 孝宏・森永 由紀

(鹿児島大学法文教育学域・明治大学商学部)

### I はじめに

本章では、中国内モンゴル自治区及びモンゴル国<sup>1)</sup>における乳酒をめぐる生産・流通・消費の現状を、現地の牧民が現在採用している牧畜戦略との関連から分析することを目的とする。本章で主として取り上げる乳酒は、馬乳を攪拌して乳酸菌発酵およびアルコール発酵を進行させた醸造酒である馬乳酒（アイラグ、チェゲー）および、主として牛乳を原料とし、上記の馬乳酒と同様に製造した醸造酒を蒸留して製造する蒸留酒（シミーンアルヒ）の2種類である。後述するように、こうした乳酒は長期間にわたり、自家消費あるいは広くても地域コミュニティの範囲で流通・消費される畜産品であったが、近年の市場経済の浸透あるいは輸送・通信テクノロジーの発達に伴い、馬乳酒に関してはそれが商品として都市部まで長距離輸送されるなど、市場を介して売買されることを目的とする流通網に取り込まれつつある状況が見いだされる。こうした乳酒が流通されうる現状の中で、牧民がどのような牧畜戦略に基づいて乳酒を生産・流通・消費しているのか、本章では筆者らの調査データに基づいて論じたい。

さて、まずは乳酒の生産方法について見てみよう。世界的な観点から

---

<sup>1)</sup> 本論では煩雑さを避けるため、現在の中国内モンゴル自治区やモンゴル国が政治単位として成立する以前の事象に関しても、特に断りなく現在の政治的単位に即して記述している。

見て、こうした乳酒が製造されているのはモンゴル高原のほか、カザフスタン・キルギスなどの中央アジア地域、ロシアのサハ・タタールスタンなどユーラシア大陸北方域に限られており、平田によれば、その原因は乳文化の発祥地となった温暖な西アジアと比較して、酵母の活発な活動を可能とする冷涼性にあると指摘する〔石井 2011 : 23 ; 平田 2013 : 381-386 ; 高倉 2012 : 212, 250〕。筆者らの実見でも、こうした乳酒は搾乳後に数時間静置し常温に冷やしてから発酵に回されるため、高温の環境下では容易に腐敗するなど乳酒の製造が困難であると思われる。なお発酵に用いられる容器はフフルと呼ばれる皮袋（モンゴル国）、プラスチック製の円筒状の容器（モンゴル国）、木製の円筒状の容器（内モンゴル）、陶器製の甕（内モンゴル）などであり、スターターとしてはすでに出来上がった乳酒のほか、穀物を発酵させたものや市販のイーストを利用するケースもある〔小長谷 1992 : 193〕。

乳酒が生産される季節は搾乳が盛んにおこなわれる夏季から秋季にかけてであり、冬季になると乳酒は生産されないが、翌年に再び乳酒を作るシーズンになった際には必ずしも乳酒をスターターとして生産を開始する必要はないため、必ずしも乳酒を越冬保存しておかなくても良い。つまり乳はシーズンごとに飲みきってしまっても構わないものであるが、後述するように地域によっては凍結保存した乳酒を融かして旧正月を祝う際に飲んだり、一部を春まで保存しておいたりするケースも見受けられる。なお、乳酒の生産には 1000 回オーダー（1 日で最低 1000 回、最高 6000 回程度）の攪拌が必要であるが、これは酸素を供給して乳酸菌と酵母菌数を増やすためである〔平田 1993 : 151-152〕。また馬乳酒の場合には 1 回に 1 頭の母ウマから搾乳できる乳量が 500 g 程度と少ないため、昼間は 2 時間おきに搾乳する手間も必要となる。この搾乳と攪拌の手間により、乳酒の中でも馬乳酒は特に大規模に生産しようとすると相当な労働力を割く必要のある乳製品である（写真 1）。

一方、常温で作られる醸造酒としての乳酒が当該地域のより古い文化であるのに対し、蒸留酒としての乳酒は後代にもたらされた技術によると考えられており〔平田 2013 : 157〕、後藤によれば、モンゴルにおける



写真1 馬乳酒の攪拌作業（モンゴル国ボルガン県）

蒸留酒は名称・実体ともに元代（13世紀）以降の所産であるという〔後藤 1968：85〕。蒸留は鍋に乳酒を入れ、鍋の上に円筒形の器具をかぶせてその上に冷水の入った半球状の容器（ブリキの洗面器などを転用可能）を乗せ、さらに容器の下に椀などを離して設置する（写真2）。鍋に入った乳酒を熱するとアルコール分が蒸発し、上の冷水で冷やされるとアルコール分が容器の表面で再度液化し、容器の表面を伝って下ってきたアルコールが最終的には椀の中に溜まるという形で蒸留酒が採取される。石毛は 12-13ℓ の醸造酒から 2ℓ の蒸留酒を採取すると報告しており〔石毛 1997：40〕、原料の醸造酒のアルコール度数が 3% 程度とすると、原料に含まれるアルコールを完全に蒸留酒へ採取できたと仮定しても 20% 程のアルコール度数となり、これは筆者らのフィールドでの実感とも大きな祖語のない数値である。モンゴル国では蒸留は一般に朝に行われ、その場で出来たてを味わうこともあり、また保存して客の接待や旧正月を祝う際に飲まれることもある〔野沢 1991：111〕。



写真2 蒸留器（モンゴル国スフバートル県）

## Ⅱ 乳酒生産の地域的偏り

こうした乳酒は、以前よりモンゴル高原内部でも生産状況に地域的な偏りが存在することが指摘されてきた。例えば平田は、モンゴル国中部のドンドゴビ県サインツァガーン郡・デレン郡において蒸留酒を生産しない事例を報告しており〔平田 1993 : 153-157〕、また東部内モンゴルでは、蒸留に加えて醸造酒としての乳酒も生産しない事例を報告している〔平田 1993 : 166〕。また内モンゴルに関しては、馬乳酒の生産が 20 世紀前半より極めて地域限定的であったことがいくつかの報告より伺われる。

例えば東部内モンゴルに関する初期の網羅的な概説書である『蒙古地誌』の下巻では、現地で生産される乳製品が列挙されているが、そこに

は「奶酒」として蒸留酒への言及、および「酸奶」として牛乳を原料とする乳酒への言及はあるが、馬乳への言及はみられない〔柏原・濱田 1919: 285-286〕。

また 1940 年代に張家口の西北研究所をベースに内モンゴル中部で現地調査を行った梅棹も、夏になれば牛乳を原材料とする蒸留酒の製造が盛んであり、冬まで貯蔵して旧正月になれば泥酔するほど飲む者が至る所で見られると述べるのに対し、馬乳酒に関してはほとんど生産されておらず、確実な生産事例として「(西スニト旗の) 徳王府、東スニト旗の活仏、アバガ旗」などを挙げるに過ぎない。このうち、王府や寺院では宗教儀礼と結びついた特殊な用途のために馬乳酒を用いると述べ、一般の飲用とは異なる点を指摘している。ただし先行研究やモンゴル人からの伝聞情報で生産地として挙げているアバガ旗に関しては「馬群を持つ家でこれを作る家がよくある」、「比較的さかんにつくるらしい」と述べ、日常的な飲用の可能性を示唆している〔梅棹 1990: 376-377〕<sup>2)</sup>。

なお、水谷は 1996 年に内モンゴルで乳製品の生産に関する調査を行っているが、そこでは内モンゴルで馬乳酒を生産しているのはシリンホト市のみであると述べており、シリンホト市東部のモドン牧場で馬乳酒の生産を実見している〔水谷 1997: 58〕。ただし水谷は調査行程の都合上、アバガ旗は訪問していない。ただし、現在のシリンホト市は清朝～民国期<sup>3)</sup>のアバガ左翼旗の領域を含み、現在のアバガ旗は同じくアバガ右翼旗の領域を含むため〔柏原・濱田 1919: 地図 26, 779-792〕、内モンゴルで馬乳酒を生産しているのが「シリンホト市のみ」であるという認識は厳密には問題があるものの、梅棹の記述と大きく齟齬があるわけではない。なお、同じシリンゴル盟でも、シリンホト市の東隣にある東西ウジュムチン旗も水谷は訪問しているが、少なくとも水谷が訪問した牧民に関する限り馬乳酒は生産されていなかった〔水谷 1997: 63-68〕。

<sup>2)</sup> アバガの住民には 17 世紀に現在のボルガン県から移住させられたタブナンゴードと呼ばれる人々が含まれており、彼らが馬乳酒生産と関連を有する可能性がある（東北アジア研究センター岡洋樹教授の個人的教示による）。

<sup>3)</sup> 厳密には 1948 年までである〔陳潮・陳洪玲（主編）2003: 55〕。

一方、モンゴル国側に関しては、乳酒生産の地理的偏差に関して直接的に言及した古い資料は存在しない。ただし馬乳酒の用途に関しては、小長谷が20世紀初頭に活躍した画家シャラブの「モンゴルの日・馬乳酒のまつり」（モンゴル国立ザナバザル美術館蔵）という絵への言及を通じ、当時の馬乳酒の生産に寺院という宗教的権威が関与しており、また消費形態についても儀礼と密接に関連している点を示唆している〔小長谷 1992 : 228-231〕。

むしろ、モンゴル国における馬乳酒の日常的な飲用が近代以降の産物であるとは考えにくいのもまた事実である。例えば石井は2008年8月にウブスハンガイ県の牧民宅で現地調査を行い、そこでは1日に4ℓの馬乳酒が1人の牧民によって消費され、当該牧民は1日のエネルギー摂取量の70%前後を馬乳酒から取っていたと報告している。このような消費の在り方に対し、石井は馬乳酒を嗜好品ではなく、夏季の食料として位置付けている〔石井 2010 : 539-541〕。

また民族誌データから、20世紀前半の乳酒の生産・消費の一端をうかがい知ることも可能である。ヴリーランドが1950年に、現在のゴビアルタイ県タイシル郡にあった旧ナルバンチン寺領の状況についてインタビューを行った記録である *Mongol Community and Kinship Structure* では、現地の牧民出身であるディルワ活仏が1920年代の乳酒の生産状況について、「ウマの騎乗に次ぐ重要な用途は乳利用で、馬乳はほとんどが馬乳酒の形で消費される」、「乳酒用として最も適しているのは馬乳である」〔Vreeland 1953 : 28-29〕と述べている。

ここでは乳酒の消費される具体的な機会について言及はないが、馬乳酒に限定した言及ではないため、儀礼に限定された用法であると理解するには無理があるだろう。石井の調査地と同様、森林ステップの辺縁地域としての同地では乳酒が夏季の食材として消費されていたと想像される。また同様の生態環境に位置するウブスハンガイ県北東部のブルド郡で社会主義時代の1983年に現地調査を行った小貫は、馬乳酒が旧正月に甕に入れてふるまわれていたことに触れている〔小貫 1985 : 148〕。なお当時、ブルド郡の馬乳酒は味が良いことで有名であり、夏季になると

農牧業協同組合（ネグデル）の管理下で生産された馬乳酒が、首都ウランバートル市のレストランや公共施設との契約に応じ、盛んに出荷されていたという [小貫 1985 : 162-164]。乳酒の流通については後で議論するが、モンゴル国では社会主義時代の後半期、農牧業協同組合という公式的な生産・流通ルートに乗って馬乳酒が流通していたことをここで確認しておきたい。

### Ⅲ モンゴル国における地域的偏差の要因検討

モンゴル国における馬乳酒生産の地理的偏差については、筆者らの共同研究プロジェクトにおいてバトオヨンが2012年冬に、自身が所属する気象水文局のネットワークを通じてモンゴル全国の329郡から各地の馬乳酒生産に関する質問紙調査を実施した [Batoyun et al 2015]。図1は各郡の生産状況について4地域に分類、図化を行ったものであり、Region Iは「ほとんど生産しない」に、Region IVは「ほとんどの牧民

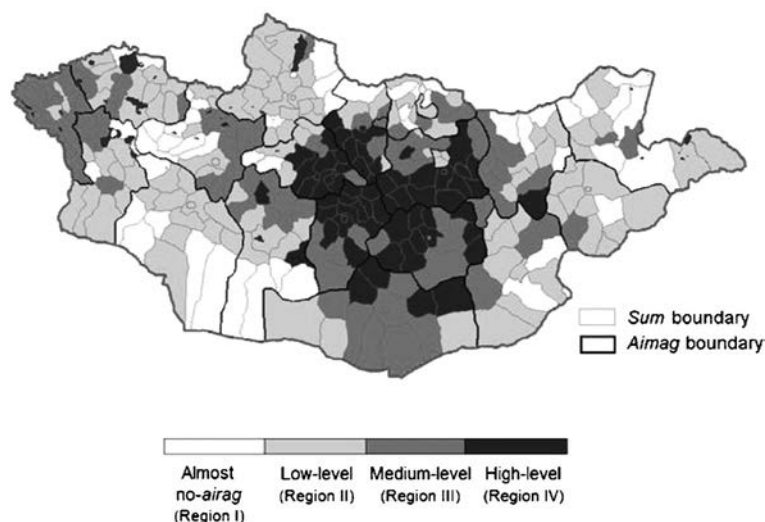


図1 モンゴル国における郡別の馬乳酒生産状況  
出典：Batoyun et al. 2015 : 15



が生産する」に対応している。

また生産状況は生産期間の長短とも対応しており、生産開始はいずれの地域においても6月もしくは7月であるのに対し、生産終了はRegion Iでは約8割が9月までに終了するのに対し、Region IVでは8割以上が9月末を過ぎても生産を継続しており、11月に終了する牧民も1割以上存在する(図2)。

こうした生産の空間的偏差は、単純にウマの飼育頭数の多寡から説明できるとは限らない。図3はモンゴル国各郡のウマの密度(頭数/平方km)

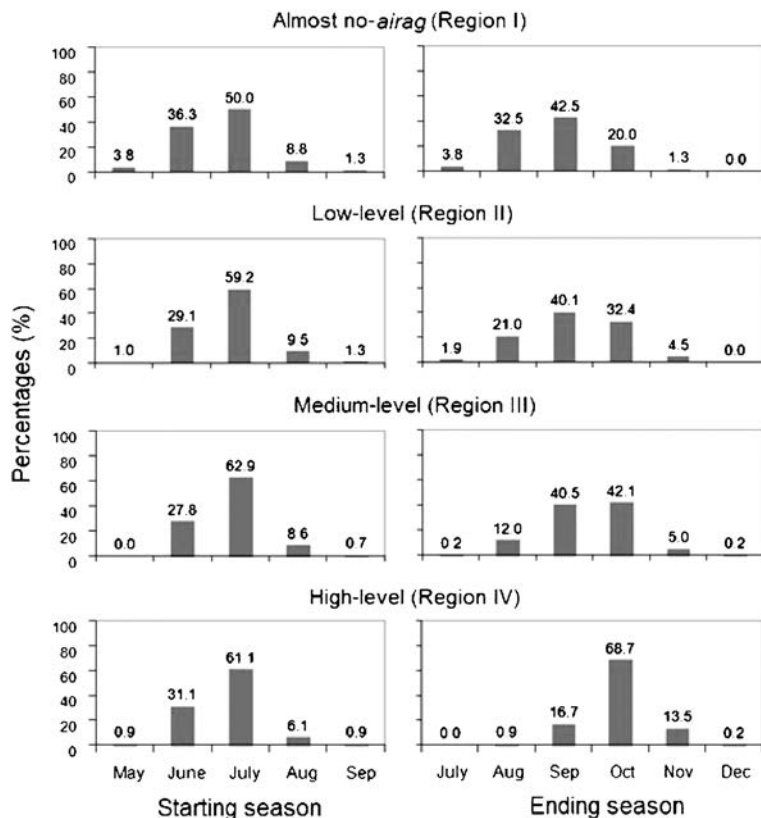


図2 地域別の馬乳酒生産開始・終了時期

出典: Batoyun et al. 2015: 18

を示したものであるが、この密度分布は、首都ウランバートル近辺から西へ広がる、前述した森林ステップ地域に関しては馬乳酒の生産状況と正の相関を示すと思われる一方、東部の草原地域ではウマの密度が高いにもかかわらず馬乳酒の生産は盛んではなく、逆に南部のゴビ地域はウマが少なくにもかかわらず盛んに馬乳酒生産を行っている。これらは、単にウマの多寡という環境的要因のみならず、現地の文化的嗜好性によって馬乳酒の生産が左右されていることを示唆している。

東部の草原地域でウマの密度が高いのは、当地がモンゴル競馬の盛んな地域だからであるが、彼らは競馬用のウマの調教に夏季の労働力の相当部分を割いているため、それに加えて馬乳酒生産の労働力を確保するのは容易ではない。また乳製品一般に言えることだが、乳製品の生産は幼畜に飲ませる乳を人間が奪取することで可能となるので、幼畜の成長を第一に考える立場とは相いれないと考えられている。そのため、競馬用のウマの育成を優先する彼らは、無理をして馬乳酒を生産する必要はないと考えている。なお、東部地域では牛乳の乳酒から蒸留酒が盛んに生産されている。

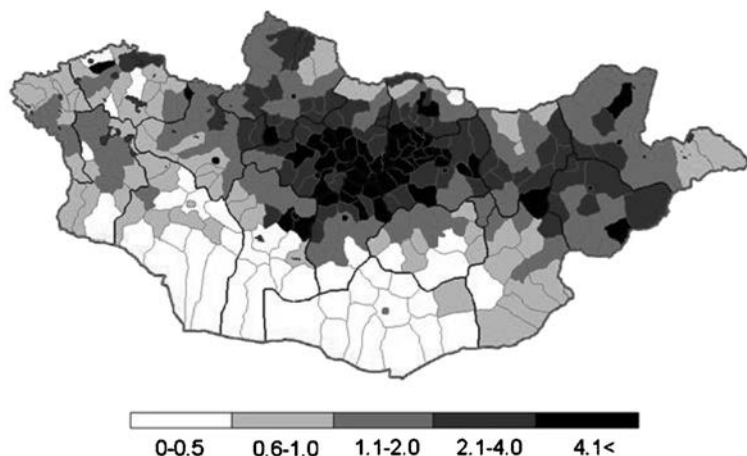


図3 モンゴル国における郡別のウマ密度

出典：Batoyun et al. 2015 : 16

一方南部のゴビ地域は元来、馬乳の搾乳開始に伴う儀礼が盛んに行われており、1970年代以降に社会主義政権がナショナリズムの高揚のために目指した全国規模で標準化された新しい民族文化の創造過程の中で、モンゴル国標準の儀礼形態として再定義されていった経緯が上村によって明らかにされている [上村 2002 : 285]。このように、馬乳酒が民俗的な儀礼と密接な関連を有していた地域においては、東部地域とは反対に多少の無理をしても馬乳酒が盛んに生産されていたのだと理解する。なおゴビ地域では、ラクダの乳を原料とする醸造酒としての乳酒も盛んに生産されている。

既に見たように、内モンゴルにおいては馬乳酒の生産地域は今も昔も非常に限られているのに対し、モンゴル国においては Region I にせよ、曲りなりにも馬乳酒は全国で生産されている。こうしたモンゴル国の状況を説明する要因も、儀礼が大きな影響を与えていると思われる。すなわち、7月11日に行われている革命記念ナーダムである。

このナーダムは人民革命の記念として社会主義政権によって始められたナーダムであり、首都で行われる国家ナーダムをはじめ、下級行政単位である各県、各郡の中心地でも同一の趣旨で行われる、国家儀礼と呼んでも差し支えない競技会である。ここでは競馬の表彰に馬乳酒が必須である。モンゴル語で「アイラギーン・タブ（馬乳酒の5頭）」と呼ばれるが、競馬ではそれぞれのレース<sup>4)</sup>で5着までにに入ったウマと騎手を務めた子供、そして馬主が表彰の対象となり、表彰式の際には司会者が「マクタール」と呼ばれる祝詞を唱えながら腕に入った馬乳酒を騎手に渡して飲ませるとともに、馬乳酒をウマにもかけて入賞を祝福するスタイルが確立している。事実、革命記念ナーダムの直前ともなれば郡政府の建物前に馬乳酒の入った大きな樽が並べられることもある。また後述するように馬乳酒を生産している牧民も、7月のナーダム前に一つの生産のピークが出現する。ナーダムのために馬乳酒を生産するという状況は Region I であっても Region IV であっても同様であり、モンゴル国全

<sup>4)</sup> レースは年齢別に行われるほか、種馬も別のレースで競われる。そのため、1つのナーダムで6種類ほどのレースが行われることになる。

体で量はともあれ馬乳酒が生産されており、しかも生産開始時期には大きな差がない理由は、この革命記念ナーダムを目指して馬乳酒が生産されているためであると解釈可能である。

そして Region IV で遅くまで馬乳酒を生産している牧民においては、二番目の生産のピークは秋季、旧正月用の作り置きを生産する時期である。いうまでもなく、Region IV は夏季の日常食用としても馬乳酒が大量に生産される地域であるが、そこでは同時に、旧正月の儀礼食としての馬乳酒生産が盛んなのである。これは Region III と Region II の境界<sup>5)</sup>に位置する旧ナルバンチン寺領に関して、旧正月の儀礼食としての用途が記載されていない点とも整合的であると思われる。

ただし注意しなければいけないのは、いかなる儀礼でも、またいかなる地域でも無条件に儀礼には馬乳酒が選択されるわけではないという点である。尾崎がモンゴル国スフバートル県オンゴン郡 (Region II) で 2001 年 8 月に実見したウスニイ＝バヤル (3 歳になった男の子の髪の毛を初めて切る儀礼) では、主催者は牛乳の蒸留酒であるシミーンアルヒを儀礼前よりいくつかの牧民世帯から買い集め、儀礼後の宴会で振る舞われていた。また、同地域では旧正月の祝いの席でもシミーンアルヒが提供され、馬乳酒が生産・提供されるのはナーダム時期に限定されていた。

#### IV 乳酒の流通

ところで乳酒の流通については現在、醸造酒とくに馬乳酒は市場流通が普及しているのに対し、蒸留酒は市場を通じての入手は不可能である。これは中国内モンゴル自治区・モンゴル国を問わず同様の状況であり、モンゴル国に関しては社会主義時代の末期も同様で、馬乳酒は都市でも売られているが、シミーンアルヒは売られていないと野沢は述べている [野沢 199 : 111]。

---

<sup>5)</sup> 現在のタイシル郡は Region II に分類されるが、旧ナルバンチン寺領はタイシル郡の最北部に位置している。またタイシル郡の北東隣に隣接するザブハン県シルーステイ郡は Region III に分類されている。

一方、さらに時代をさかのぼった 20 世紀前半の状況についてみると、少なくともモンゴル高原から域外への流通品目の中に、乳製品全般が含まれていなかったことが明らかになる。後藤の 1930 年代の調査によれば、モンゴルにおける商取引に従事する商人「蒙古行」の取引形態としては、家畜や毛・皮などと引き換えに雑貨その他を信用取引で売り込むとある〔後藤 1968 : 372-375〕。こうした家畜は中国内地まで歩いて移送され、肉として消費されるか役畜として利用される。一方乳製品は、消費者である漢人の食生活の中に乳製品が存在しないことから、取引対象とはなっていないことが容易に想像される。さらに本論の対象である乳酒に至っては、液体を収容する容器を必要とするため輸送に向かない点や、醸造酒に関しては日持ちの悪さを考慮すれば、そもそも長距離の移送を試みる対象ではなかったと理解されうる。

ただし、空間スケールを縮小して乳製品の動きを見た場合、必ずしもそれは自家消費ばかりではなかったことが想像される。例えば、バターオイルに関しては寺院への献納<sup>6)</sup>が、馬乳酒に関しても儀礼の主催者となる寺院や王侯への献納が想定される。また蒸留酒に関しても、上述のような家庭内的な儀礼の際にも現在と同様、個人間での融通が行われたことは想像に難くない。これらの要素を勘案すると、乳酒は必ずしも自家消費に限られはしないにせよ、歴史的には極めてローカルな範囲で消費されてきたと考えるべきであろう。

それでは、乳酒がローカルな範囲を超えて移動を始めるに至ったストーリーはどのようなものであろうか。現時点ではまだ実証的な資料が不足する部分も多く、あくまでも仮説の域を出ないものであるが、以下にモンゴル国に関するストーリーについて筆者らなりの考えを示しておきたい。なお内モンゴル自治区に関しては一層資料が不足しているため、その後に比較として言及するにとどめたい。

まず乳酒が広域的な移動を開始する要件として考えられるのは、以下の要素である。1) 乳酒の生産域外に乳酒を需要する人々が存在するこ

---

<sup>6)</sup> 寺院ではバターオイルが燈明用の燃料として利用される。

と、2)生産者が域外の乳酒需要者の存在を知っていること、3)乳酒を輸送するための技術的裏付けが存在すること。これは乳酒の長距離移送を妨げてきた諸要因の裏返しである。まず1)に関してだが、これは歴史的には存在しなかった域外の乳酒需要者が出現することを意味している。モンゴル国に関しては、社会主義時代における都市人口の激増が第一の要因として、加えて馬乳酒を薬として利用する診療所が各地に作られたことが第二の要因として考えられる。第二の要因については、小長谷がすでに馬乳酒による高血圧、結核、胃炎などへの治療法がモンゴル医学における一分野を構成している点、モンゴル国各地には馬乳酒診療所が存在することを言及しているため〔小長谷 1992 : 218-221〕、本論では第一の要因について詳述したい。

モンゴル国の首都であり、モンゴル国民の日常会話ではしばしば「都市（ホト）」という単語1つで言及されるウランバートルの人口がモンゴル国の総人口に占める比率を示したものが図4である。

ここから明らかになることは、ウランバートルの人口比は年々増大しているが、その中でも特に顕著なのが1950年～1963年と、2000年以降である点である。前者はモンゴル国においてコメコン体制内での計画経

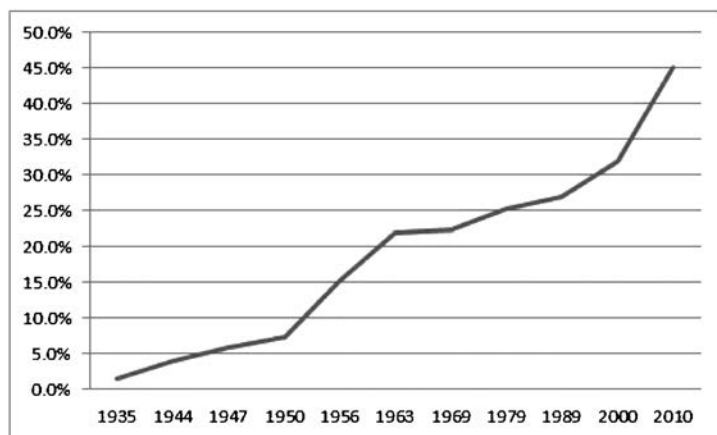


図4 ウランバートル市人口の対総人口比（1935-2010年）

出典：Эрдэнэсүрэн ба Бадрах 1993 : 32-118

済の実施が本格化し、農牧業に関しては1950年代末より全国で農牧業協同組合（ネグデル）が組織され、工業化とそれを支える農畜産物の国家調達が加速された時期に相当する。一方、後者は後述の「郊外化」と関連するが、1999年から3年連続で発生した寒雪害（ゾド）などの影響で、経済の疲弊した地方からウランバートルへの人口流入が加速した時期である。

なお、ウランバートルの人口は1950年～1963年の13年間に4倍に、2000年～2010年の10年間には1.6倍に増加しているほか、後者の期間にはウランバートルの人口増加（48万人）がモンゴル国全体の人口増加（38.1万人）を上回っている。こうした人口増加は、地方在住者のウランバートルへの人口流入を抜きには説明がつかない現象である。そして、こうした流入人口の中には当然、乳酒を嗜む地域の人々が含まれていたと考えられる。さらに2)の要素と関連することであるが、彼らの親族のうち一部は、出身地で乳酒へのアクセスを保った生活を継続していたと考えられる。こうした条件は、少なくとも1960年代以降、つまりモンゴル国における社会主義集団化時期には揃っていたと思われる。

1)と2)の条件が揃えば、次に検討すべきは3)となる。ここでは蒸留酒と、非加熱の醸造酒で大きな差が存在する。すなわち前者であれば個人が、工場製品であるウオッカの空き瓶などを利用して乳酒を詰め、公共交通機関などを利用して手持ちで運搬することも困難ではない。それに対し、醸造酒は発酵が継続しているため炭酸ガスを発生する。それゆえに密閉性と耐圧性に加え、時に減圧が可能である容器は、社会主義時代はもちろん尾崎がウランバートルに滞在していた1990年代半ばにおいても個人で入手することは困難であった。

現在であればポリタンクが容易に入手でき、それに詰めて車に積載して運搬することが可能であるが、それでも運搬中の醸造酒が噴出して車内を汚すことを嫌い、運転手は運搬に際してポリタンクの固定や頻繁な減圧を心がけるのが常であり、運転手によっては醸造酒の運搬を快く思わず、可能な限り積載を断ろうとすることも珍しくない。こうした違いが、醸造酒である馬乳酒の流通を農牧業協同組合が担った一因となった

ことは想像に難くない。実際、本書の冨田論文（第2章）や上述の小貫（1983）の記述でも見られるように、馬乳酒の生産が盛んな地域では農牧業協同組合を通じて、例えばウランバートルや県中心地のレストランや学校、診療所などの公共施設と契約を結んで出荷されていたことがうかがえる〔小貫 1983 : 164〕。

ただし本質的な問題として、なぜ農牧業協同組合が馬乳酒のみを商品として流通させ、蒸留酒は商品としなかったのかという理由に関しては現状では明らかではない。すでに論じたように、儀礼食という文脈ではむしろモンゴル国全体での馬乳酒生産を推進したと考えられるため、もともと馬乳酒生産の盛んな地域において馬乳酒が流通対象として積極的に選択された理由は、生産における蒸留酒以上の地域的偏差、夏の食材あるいは薬剤としての積極的評価などが考えられる。これは逆に、蒸留酒は生産上の地域的偏差が小さく、また薬剤としての効能はあまり期待されていないこと<sup>7)</sup>、さらにアルコールとして酩酊状態をもたらす機能としては、ウオッカ（麦などを原料とした穀物醸造酒）という度数が高く、より簡単に大量生産可能な代替物が存在したために、農牧業協同組合が商品として流通させようとしなかったのではないかという推測にも応用可能な論理である。しかもウオッカは、大消費地である都市に工場を建設して原材料を運び込み、生産することも可能である。むしろ、こうした推測は現状では具体的な資料的裏付けに乏しいため、今後のさらなる調査が必要である。ただ間違いないことは、乳酒のうち、モンゴル国では社会主義集団化時期に馬乳酒は産地から都市への流通が農牧業協同組合という公的なルートを通じて確立したのに対し、蒸留酒ではそれが起こらなかったということである。

## V モンゴル国における社会主義崩壊と郊外化

そして周知のとおり、モンゴル国では 1990 年代初頭に社会主義の崩

<sup>7)</sup> アルハンガイ県では外傷薬として使用されているという（共編者・戸戸真理氏の個人的教示による）



壊を迎えた。乳酒の生産地域である牧畜社会における社会主義の崩壊は、農牧業協同組合を通じた農畜産物の生産・流通システムの崩壊を意味していた。というのも、社会主義集団化時期の背景となったコメコン体制では、モンゴル国における農畜産物の生産はソ連という買い手の存在に支えられていたため、ソ連という買い手が消失すればその生産・流通システム自体が存在意義を失うためである。そして社会主義崩壊後の1990年代、モンゴル国の牧畜地域においてはある種の緊急避難的な、自給性の高い牧畜が主流となる。というのも自国の貨幣価値が下落しインフレ傾向の強い時代において、家畜は単に食糧源となるだけではなく、インフレに強い安全な資産という機能も果たしていたためである。しかも社会主義崩壊後、家畜は国民へ私有財産として分配され、牧民にとってはほぼ唯一の資産となった。かくして、販売先を失った一方で家畜増殖へのモチベーションだけは維持されたモンゴル国において家畜は増殖を続けたが、その結果は1999年から3年連続で発生した寒雪害により、ほぼ社会主義崩壊後の増殖分に相当する家畜が死亡するという大災害であった〔尾崎 2008 : 483〕。

この寒雪害は、小規模な家畜群しか持たない牧民ほど深刻な打撃をもたらした。というのも、牧民として生活をするためには食料確保や現金収入のため、どうしても一定数の家畜を処分しなくてはならない。この最低限処分する家畜数が牧民世帯の家畜の増殖ペースを上回ったとき、牧畜経営は縮小再生産に陥る。つまり将来的には家畜数がゼロとなり、牧民が継続できなくなる事態へと至る。そうなれば都市などへ移住して無産労働者となるほかに、実際に前述した2000年以降のウランバートルの人口激増はこうした事態を背景として発生していると解釈できる。

ただし、2000年以降のモンゴル国の経済状況は、牧地の空間的二極化をもたらした。2000年以降、モンゴル国では社会主義崩壊後の混乱も一段落し、かつて都市が有していた市場機能が回復して消費も旺盛となった。その一方で、社会主義時代には国家によって採算を無視して担われていた牧地＝都市間の輸送が市場原理に即して担われるようになった。

た。その結果、市場に近い都市郊外や幹線道路沿いの牧地は輸送コストが低いため、畜産品を販売するにも物資を購入するにも有利な地域として牧民の注目を集めるようになった。しかも都市の郊外であれば牧民に現金収入をもたらす畜産品として、家畜生体やカシミア、皮革に加えて乳酒を含む乳製品が加わることになる。というのも、金を払って乳製品を購入してくれるのは都市住民だけであり、しかも乳酒や生乳などの液体物は、前述したように長距離輸送には不向きなため、都市から離れた牧民との競争が発生しづらいためである。馬乳酒に関してはネグデル崩壊以後、公的な機関が大々的に馬乳酒を生産地から集荷し、都市部へ輸送することもない。一方でウランバートルは一層の地方出身者<sup>8)</sup>を抱え、潜在的な需要は着実に拡大している。こうした状況で、都市郊外での馬乳酒の生産と供給が開始したと思われる。

都市郊外では売れる畜産物が多様であるという点は、かろうじて縮小再生産に陥らない程度の家畜規模で生活している牧民には非常に重要である。なぜなら乳は、肉や皮革と異なり家畜を殺さずに入手可能なので、家畜の乏しい牧民には願ってもない産物であるためである。こうして、都市郊外の牧地への牧民の集中が特に 2000 年以降、顕著に進行した。尾崎らはこれを「郊外化」と呼んでいるが、尾崎のボルガン県およびドンドゴビ県での調査データによれば、この郊外化の担い手の多くは元都市住民と遠隔地<sup>9)</sup>から移住してきた零細な牧民である。郊外は既に家畜の密度が高まっており、大規模家畜所有者にとっては草不足への対応として行う季節移動の余地がないという意味で必ずしも好ましい牧地ではなくなっている。その点零細な牧民であればそもそも草不足に陥りにくく、また年金などの他の現金収入源を持っている元都市市民にとっては乾草を購入することで対応できるため、相対的にデメリットは少ない〔尾崎 2013 : 115-116〕。

<sup>8)</sup> 地方出身者の中には、地方に家畜を維持しつつウランバートルに物件を購入し、家族の一部がウランバートルに居住している富裕層も含まれるため、地方出身者が必ずしも貧困層ばかりという訳ではない。

<sup>9)</sup> 尾崎のモンゴル高原の牧畜空間類型では「遠隔地」は「郊外」の対概念である。

また上述した馬乳酒の大規模生産地に該当する地域には、首都ウランバートルおよびモンゴル国第3の都市であるエルデネトの郊外が含まれる。そのため、こうした地域の郊外で車を走らせていると、随所に馬乳酒販売を行っている牧民の看板を頻繁に目にするのが現状である。なお、馬乳酒の生産・販売は1990年代にも細々とではあるが存在していたことも事実である。社会主義崩壊以後、統計的資料がないのでモンゴル国全体での馬乳酒の生産量を把握することは困難であるものの、筆者らのフィールドの実感としては、馬乳酒の生産は郊外化の進行と並行して増大している。これは馬乳酒の流通において、以前は都市の購入者が生産者の元に出向かなければ買い付けができず、また現地へ行ってみない限り必要な量や質が確保できるか不確かであったのに対し、近年は郊外を中心に携帯電話の通信可能エリアが拡大し、購入者が牧民に電話で馬乳酒を注文し、それに対応して牧民が自ら都市へ持ち込むことも可能になったことも一因であると思われる。また加えて、上述した密閉容器（ペットボトルなど）の入手が容易となったことも要因として指摘しうる。

もちろん、上述した馬乳酒の生産地は遠隔地にも存在するし、大規模家畜所有者はむしろ遠隔地に点在している。彼らは所有する家畜数が多いため、例えば馬乳酒の生産を挙げても、より大規模な生産が可能である。森永らの2013年のインタビュー調査によれば、遠隔地に属するボルガン県サイハン郡・モゴト郡の牧民も、ナーダム時期を中心にウランバートルへ相当量を販売していたが（図5）、一転して干ばつとなった2015年夏には販売を取りやめる牧民も少なからず存在した。また旧正月時期に生産した馬乳酒は2014年も2016年も自家消費や親族・友人への贈答用が中心であり、家畜の生体販売などで十分な収入源の見込める裕福な牧民に限れば、遠隔地での馬乳酒生産はあくまでも副次的な収入源の域を出ない<sup>10)</sup>。もちろん彼らは販売するとなればナーダム前など、

<sup>10)</sup> ヒツジ1頭の価格（オス成畜）と馬乳酒200kgの価格がほぼ等しい。1頭の牝馬から200kgの馬乳酒を得るには、70日程度の搾乳が必要である一方、成畜300頭程度の中規模ヒツジ群を所有していれば、一般に1年で150頭程度の仔ヒツジが産まれる。

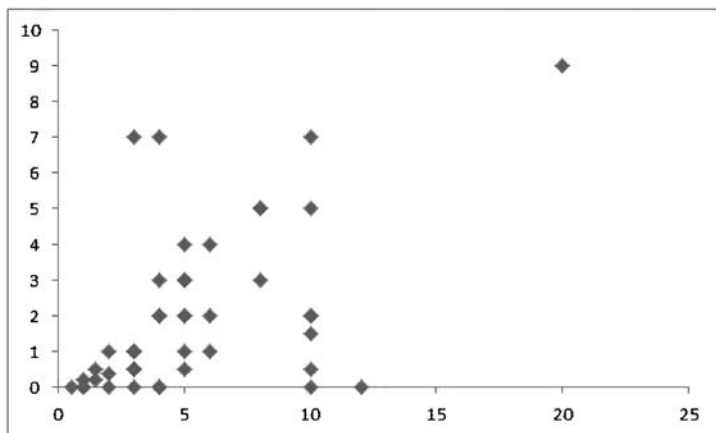


図5 モンゴル国遠隔地における馬乳酒生産量(横軸)と販売量(縦軸)(単位:トン)  
2013年、ボルガン県サイハン郡・モゴト郡、n=47

確実に売り上げの見込める時期に集中して生産するというように、市場志向的な行動を取ることも事実である。

また当地は、社会主義集団化時期には農牧業協同組合を通じて大量の馬乳酒を出荷していた地域であった。現在でも流通範囲は農牧業協同組合が開拓した地理的範囲を踏襲するように、都市部への直送が主となっている。なお2000年代より、モンゴル国の舗装道路網整備が進行し、舗装道路へのアクセスが容易である限り都市部への運搬時間は大幅に短縮されたことも事実であるが、遠隔地の牧民の多くはこうした舗装道路から距離を置いて居住しているため、馬乳酒を容易に都市へ出荷できるとは言い難い状況に基本的な変化はないと言えるだろう。冬季は馬乳酒を凍結させて運搬することが可能なため、運搬条件としては比較的容易ではあるが、現状では冬季に積極的に流通させるという傾向はみられない。

## Ⅵ 内モンゴル自治区における歴史的展開と牧畜戦略

一方、内モンゴル自治区に関しては乳酒が流通する条件の歴史的展開が異なっている。中華人民共和国成立以降、政府は都市への人口流入を

厳しく制限しており、基本的には現在に至るまで戸籍制度を通じての都市人口のコントロールは継続している。特に文革時代（1968年～1978年）には「下放」などを通じて、都市人口の増加抑制が図られた。その後、改革開放政策下の経済成長に伴い正規の都市人口も都市への出稼ぎ者も増加するが、一般に内モンゴルを含む中国で都市域の拡大が顕著になるのは2000年以降の積極的な開発政策の導入以降である。ただし内モンゴルの場合、シリントンのように元来は寺院しかなかった場所に中華人民共和国成立以後、都市が建設された事例もあるため、都市への人口流入が皆無であったとは言い難い面も存在する（図6）<sup>11)</sup>。

さらに、内モンゴル自治区の場合はモンゴル国と異なり、区都のフフホトが全自治区の物流・人口流動の唯一の中心地となることはなく、また自治区レベルでのモンゴル族の文化的標準化の度合いはモンゴル国と比べてはるかに低いと、乳酒の生産域が拡大したり、乳酒の広域的流

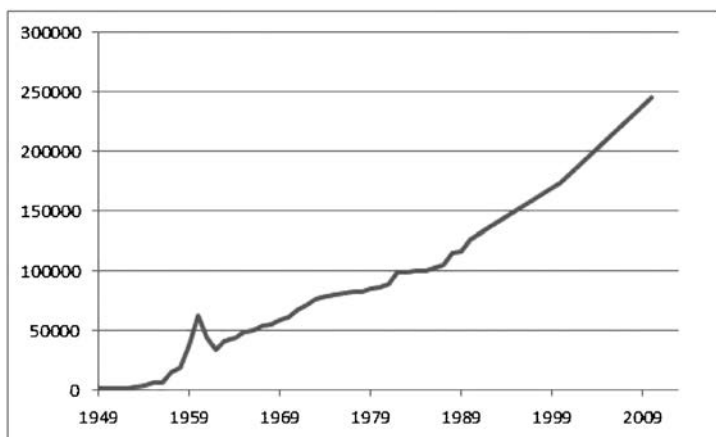


図6 シリントンの人口変化（1949-2010年）（単位：人）

出典：錫林浩特市誌編纂委員会（編）1999：92，CITY POPULATION（<http://www.citypopulation.de>）

<sup>11)</sup> 1959年と1963年は行政区画が変化しているため、ここでのデータは連続していない。また人口データには牧民人口も含まれており、1990年の都市人口は10万人である〔錫林浩特市誌編纂委員会（編）1999：45，91〕。なお、2000年と2010年については人口センサス（普查）の数値を利用したが、これは現地の戸籍を持たない外来人口も含まれている。

通が開始したりする契機に乏しかったと言えるだろう。なお、モンゴル国と同様、内モンゴル自治区でも 1950 年代後半から 1970 年代後半は社会主義集団化が実施され、牧畜地域の物流は人民公社（アルディン・ネグデル）や国营農牧場が担っており、1980 年代初頭より始まる人民公社の解体によって物流が民営化されるというプロセスをたどっている。また人民公社の解体は牧民にとって家畜の私有化をも意味しており、後述の事例から、馬乳酒の流通も 1980 年代より開始することが確認できる。

無論モンゴル国と同様、内モンゴルでも乳酒のうち馬乳酒のみが流通の対象となった背景には、何らかの前史が存在したものと想像される。一つの可能性は、小長谷が言及したシリントのモンゴル医学研究所など、医薬品としての利用である [小長谷 1992 : 218]。また上述した、シリントの町の成立過程なども影響している可能性がある。後述するように、現在の馬乳酒の流通も大まかにはシリント盟内部にフフホト、オールドス、通遼などの都市を加えた程度の範囲であり、前史としての流通エリアも、シリント盟をカバーしていれば十分に説得的であると思われる。

なお尾崎は先行研究から、現在の内モンゴル自治区における牧地も、モンゴル国と同様に「郊外」と「遠隔地」に相当する空間の二分法が成立することを示唆した（尾崎 2011）。これは言うまでもなく、都市空間からの距離によって牧民の実践する牧畜戦略が異なっていることを示しているが、その背景についてはモンゴル国とは異なる。というのも、内モンゴルでは 1980 年代以降の「改革開放政策」により牧地も世帯単位に分与され、厳密には有期（30 年など）の利用権ではあるものの実質的には私有権に等しく、自由な季節移動も他所への移住も行えないのが現状である。さらに、政府が定める牧養力を超えて家畜を飼養してはならないとする「草畜平衡」政策の存在や、牧民に対する補助金の多くが世帯の牧地面積に基づいて支給されていることから、内モンゴル自治区において牧畜戦略に本質的に影響を与えている最大の要素は政策と牧地面積であると言える。

牧民世帯が保有する牧地面積は、人民公社解体時における各行政単位の人口密度とその後の相続・婚姻等の状況で左右される。その中で前者は、社会主義集団化時期に外部からの移民を受け入れた地域<sup>12)</sup>などで特異に人口密度の高い地域が見受けられるものの、一般的な傾向としては交通が相対的に便利な都市（旗中心地以上の定住地）に近い牧地は人口密度が高く、モンゴル国との国境地域に代表される遠隔地域の牧地は人口密度が低くなっている〔尾崎 2013 : 113, 116-118〕。さらに現在では、ツーリストキャンプなど都市の郊外でなければ選択しえない収入源があることも明らかになっている〔尾崎 2011 : 11-14〕。以上のような理由より、内モンゴル自治区の牧畜空間に関しても郊外と遠隔地という空間類型は意味を持つと考えられるが、本論で取り扱う内モンゴルの馬乳酒流通はモンゴル国におけるそれと同様、基本的に郊外の牧地に関わる現象となっている。

## Ⅶ 内モンゴル自治区における流通事例概要

本論で取り上げる内モンゴル自治区における馬乳酒の流通事例は、尾崎が 2015 年 8 月にシリングル盟シリンホト市およびアバガ旗で実施した訪問調査データに基づいている。すでに述べたとおり、シリンホト市とアバガ旗は古くより馬乳酒の生産が確認されている地域であり、また逆に内モンゴル自治区の他地域では家畜の搾乳そのものが行われなくなっている場所も少なからず存在するため〔尾崎 2013 : 117-118〕、当該地域を調査地として選定した。なお、シリンホト市はシリングル盟の中心地として 17 万人（2011 年現在）<sup>13)</sup> の人口規模の都市と 1.5 万平方 km の土地を、アバガ旗は中心地に人口 2 万人（2011 年現在）の小都市と 2.7 万平方 km の土地を擁する行政区画であり、土地の大部分が牧地と

<sup>12)</sup> 尾崎の調査地域では、人民公社ではなく、国営農牧場が設立された地域でこうした傾向が顕著である。

<sup>13)</sup> ここで挙げた人口は登録人口なので、実態とは多少なりとも乖離している可能性がある。

して利用されている内モンゴル自治区でも典型的な牧畜地域である〔内  
蒙古自治区統計局(編) 2012: 684,686〕。

訪問世帯は、シリンホト市では共同調査者である内蒙古大学のバト氏  
の知人1世帯、アバガ旗では現地案内人であったアバガ旗民族中学校の  
オール氏の紹介による5世帯である(図7)。シリンホト市やアバガ旗  
で馬乳酒を生産する世帯が多いとはいえ、オール氏や訪問世帯の人々に  
よれば生産世帯は「1つのガチャ<sup>14)</sup>で数世帯から10世帯程度」であり、  
外部に販売するほどの生産規模の世帯はさらに少ないとの認識であつ  
た。1つのガチャにおける牧民世帯数は、尾崎の四子王旗・西スニト旗  
の調査事例では80~200世帯程度と幅があるが、数世帯から10世帯と  
いう数字は10%を下回るレベルであると考えられる。



図7 内モンゴル自治区における調査世帯等の分布および主要道路

<sup>14)</sup> ガチャは内モンゴル牧畜地域における行政単位の末端に位置づけられ、「村」と訳されることが多い。モンゴル国では「バグ」と呼ばれる。



なお、こうした馬乳酒生産世帯の少なさは、馬群を所有しているにもかかわらず搾乳しない世帯の存在も一部では存在するとはいえ、むしろウマそのものが飼養家畜として選択されにくい内モンゴル自治区の現状を反映している。世帯番号5の事例では2008年より乗馬クラブと馬乳酒の生産、および馬の生体販売を開始しているが、これは婚姻により妻の牧地を継承した同世帯の主人が、現地のウマの減少を危惧して着手した事業であり、同氏も「ウマはあまり儲かる動物ではない」と述べている。また騎乗用としてのウマの活用も、現在ではバイクなど内燃機関を利用した移動手段の普及と牧地の固定化により、「ウマに乗っていく場所がない」が「雪が降る冬だけはウマに乗る」（世帯番号1）程度の利用にとどまっており、すでにウマは牧畜生活に必須の家畜ではなくなっている<sup>15)</sup>。

図7で示している「ツェンゲルボラグ」は、世帯番号2の牧地が存在する場所で、馬乳酒の生産世帯が比較的多い地域であると現地では認識されている。世帯番号2の所在地として示してあるのは旗中心地にある自宅兼店舗（馬乳酒バー）の場所である。ただし自宅はツェンゲルボラグにもあり、夏は旗中心地、それ以外の季節はツェンゲルボラグで生活している。なお世帯番号2の馬群は、夏はアバガ旗中心地から30kmほど離れた友人の牧地で放牧しているとのことであった。

各世帯の牧地の所属行政単位および生産・販売履歴をまとめたものが表1である。大まかな傾向として、都市空間から離れると馬乳酒の販売傾向が下がること、本格的な販売は過去10年の傾向であり、また販売世帯の中には従来馬乳酒を生産していなかった牧民の新規参入も認められることが看取される。1980年代から馬乳酒を販売していた世帯番号1によれば、1990年代までは自前で輸送手段を持っていなかったため、都市から買い付けにやってくれば売っていたが、2000年に自動車を買って自前の輸送手段を持ち、また携帯電話の電波が届くようになって本格的な販売を開始したという。また2010年から馬乳酒の販売を開始した

<sup>15)</sup> 同様の現象はモンゴル国の郊外でも発生している [尾崎 2013: 115]。

表1 各世帯の牧地の所属行政単位および生産・販売履歴

世帯	牧地の所属行政単位	製造開始	販売開始
1	シリント市バヤンシル牧場	昔から	1980年代から。本格的に売り出したのは2000年代から
2	アバガ旗バヤントグ=ソム	昔から	2012年に旗中心地で馬乳酒バーを開店、それ以前はナーダムや宴会の時に販売
3	アバガ旗ブリグト鎮	昔から	2010年
4	アバガ旗ブリグト鎮	昔から	基本的に自家消費用だが、頼まれて売ることもある
5	アバガ旗ブリグト鎮	2008年	2008年、乗馬クラブも併設
6	アバガ旗イフゴル=ソム	2015年	自家消費のみ

表2 世帯主の年齢および各世帯の基本的な生産状況

世帯	年齢	機械化	搾乳頭数	製造期間	日販売量	備考
1	35	あり	30	6月～10月初	100 kg	自家搾乳のほか馬乳を購入
2	46	あり	75	6/1～9/1	85-90 kg	製造はアバガ旗中心地の店舗内
3	28	あり	13	6/7～11月初	50-55 kg	
4	70	なし	4	6/20～10月	自家消費	日産 15 kg
5	38	なし	25	6/20～19/4	75 kg	
6	63	なし	1	7月～終了未定	自家消費	日産 2 kg

世帯番号3は当初ウマの生体販売を目論んでウマを増やしたが、結局ウマの相場が下落したために利益の見込める馬乳酒の生産に切り替えたという。なお世帯番号2の牧地が存在するアバガ旗北部のツェンゲルボラグには馬乳酒の生産者が数世帯存在するが、現地で馬乳酒を生産しても売れないため、馬乳酒を販売している牧民は全て市場である旗中心地の近くへ移動して生産しているとのことであった。

表2は、世帯主の年齢および各世帯の基本的な生産状況を示したものである。すでに述べたとおり馬乳酒の生産で重要な労働は搾乳と攪拌であるが、現在の内モンゴル自治区では販売を目的として大規模に生産している牧民においてはメスウマの搾乳と放牧を担当する労働者の雇用と、15分で1000回攪拌できる馬乳酒製造機の導入が常態化していることがわかる。牧畜労働者に関して近年はモンゴル国から労働者を雇用する傾向が見られるが、これは過去2～3年で広まった現象であり、それ以前は内モンゴル自治区内で労働者を確保するのが一般的であったという。なおモンゴル国から労働者を雇用する最大の理由は牧畜労働者の不足であり、一般に人づてに労働者を見つけてくるという。

表2では自家消費となっている世帯番号6の事例ではメスウマ1頭を息子の友人に預託しているが、預託先では20頭のメスウマをモンゴル国の労働者を雇って搾乳しており、攪拌は手作業で行っているという。世帯番号6の主人は、生産された馬乳酒を必要に応じて貰い受け、自家消費に供している。なお世帯番号6がメスウマを預託している理由は、ウマが搾乳に慣れるまでは搾乳が難しいためだという。この世帯は馬乳酒の生産には2015年から関与しているが、400頭近くの馬群を所有しており、ウマの生体販売で主たる収入を得ている。つまりウマはいたが搾乳はしていなかった、というケースである。

一方、自家消費を主目的として馬乳酒を生産している世帯番号4については世帯主人が高齢なこともあり、高血圧治療など健康目的に飲むことが強調されており、また旧正月での飲用にも言及するなど、いわゆる伝統的な生産者の馬乳酒に対する意識を垣間見ることができた<sup>16)</sup>。この世帯も現在は20頭ほどのウマしか所有していないが、2000年の寒雪害で被害を受けるまでは70頭の馬群を持っており、メスウシの数も多く牛乳から蒸留酒も製造していたという。ただし現在でも牛乳の醸造酒は製造しているため、馬乳酒を選択的に残したというよりは蒸留を止めたと理解すべきだろう。また今回の調査データから、一般に若い世代の牧民ほど馬乳酒の販売に熱心である傾向がうかがわれる。

モンゴル国からの労働者の出身地について、調査事例に関しては東部のヘンティ・スフバートルや北部のセレンゲといった、モンゴル国の中では馬乳酒の大産地とはみなされない地域である点が興味深い。むしろ彼らはウマの搾乳や馬乳酒が作れるということで雇用されているわけであるが、出身地が馬乳酒を大々的に販売する長期生産地でないことや、あるいは彼らの出身地での家畜所有状況などが影響していることが想像される。労働者の年齢層は30歳前後から40代半ばであり、世帯番号3

<sup>16)</sup> 一般に内モンゴル自治区における馬乳酒の名称は「チェゲー」であるが、世帯番号4のみが「(メスウマの) アイラグ」という名称で言及していた。世帯番号4は牛乳を原料とした乳酒(メスウシのアイラグ)も生産し、世帯番号4の主人は「アイラグが(醸造した乳酒に対する)元来のアバガの語彙である」と述べていた。

の事例では4歳と2歳の子供を連れて来ていた。世帯番号5の事例ではスフバートル在住の男性とウランバートル在住の姉が2人で来ており、家畜の扱いは心得ているものの、モンゴル国内では必ずしも家畜の飼養で生計を立てている人々ではない可能性がうかがわれた。なお、搾乳方法については必ず最初に仔ウマによる催乳を経るモンゴル国式と、個体によっては催乳なしで搾乳を行うアバガ式の違いが認識されており、モンゴル国出身の労働者はモンゴル国式で搾乳を行っていた。一方、馬乳酒の生産方法についての地域差は認められず、彼ら自身も全く同じであると認識していた。

一方の馬乳酒製造機も導入は2014年頃からである。これは人力による攪拌作業を動力に置き換えただけの単純な機械であり（写真3）、価格は2000元（約4万円）と安価であるが、電線が引き込まれていないと使えないため、すべての牧民が購入しているわけではない<sup>17)</sup>。世帯番号2の事例では、ウマを放牧している牧地ではモンゴル国からの牧畜労働者が搾乳に従事しているが、そこには電線が引き込まれていないため、自動車で馬乳のまま夜間に旗中心地まで運び、店舗裏手に設置した製造機で馬乳酒に加工している。内モンゴル自治区では一般的に販売用の馬乳酒は搾乳間もない発酵の進んでいないものが好まれる傾向があり、世帯番号6の主人は「今日搾った馬乳は明日出荷しなければいけない」と述べ、世帯番号5の主人は「都会の人は乳の香りがするくらいの弱い発酵のものを好む」と述べていた。また世帯番号4以外の事例では、馬乳酒を大型の電気冷凍庫に保存することで発酵を止め、モンゴル国で一般に見られるような発酵の進んだ酸味の強い状態になる前の味を保持しようと努めていた。もちろん、電気冷凍庫も電線の引き込みが必須である。なお冷凍庫での保存は、旧正月時期の馬乳酒の販売も容易にする。世帯番号5によれば、旧正月期の販売価格は夏季のおよそ1.5倍

<sup>17)</sup> 電線の引き込まれていない世帯では風力や太陽光で発電し、バッテリーに蓄電している。牧民宅への電線の引き込みは内モンゴル自治区で定住化が完了した1990年代後半より始まっているが、一般的に電線や電柱など引き込みに必要な費用は牧民の自己負担である。



写真3 作動中の馬乳酒製造機

であるという。

また生産期間については、2015年より生産を開始した世帯番号6を除けば6月に生産を開始しており、終了期間にばらつきが存在する点も含めてモンゴル国と大きな差は見出しがたい。ただし終了の理由づけについては、特に早期に終了する事例において「ウマを太らせるため」（世帯番号2）、「草が乏しい」（世帯番号5）に加え、「9月になると学校が始まるので牧畜労働者が帰国する」（世帯番号2、5）と、労働者側の都合にも言及がなされていた。むろん長期間の生産を目指していれば、世帯番号3のように当初から長期の契約に応じる労働者を確保すれば良いだけであるが、逆に言えば自身が搾乳して細々と自家消費用の馬乳酒を製造するよりは家畜の栄養状態や牧地の保全が優先されると解釈すべきだろう。

## Ⅷ 内モンゴル自治区の郊外牧民にとっての馬乳酒の位置づけ

表2の日販売量と馬乳酒の生産日数より、牧民の年間販売量が推計可能である。積極的に販売を行っている4世帯の場合、年間で5～12t程度が販売されている。内モンゴルでの卸値は500g（1斤）で10元であり、モンゴル国における卸値（1ℓで1000トゥグルク：2014年尾崎調べ）の6倍以上（円換算による比較<sup>18)</sup>）となっている。以下では世帯番号1を例に、馬乳酒生産の収支を試算してみる。

世帯番号1に関する資産の収支条件は以下のようにになっている。ここでは6月初めから10月初めまで、約120日間馬乳酒を製造・販売している。居住地はシリンホト市内であるが、主な販売先はアバガ旗の乳製品店である。他にフフホト市のレストランにも販売しており、こちらは売値が500gで12元と若干高価であるが、出荷量が少ないため試算ではすべて上述の500gで10元という価格を適用する。買い手の電話注文に応じて出荷しており、1日の平均出荷量は100kg（200斤）、シリンホト市内まで自身が自動車で運び、そこから運送業者に委託してアバガ旗もしくはフフホト市まで輸送している。また馬乳が不足するため、1日40kg（80斤）ほど近隣の牧民から馬乳を購入し、世帯番号1で発酵させている。近隣の牧民が自身で馬乳酒を生産せずに馬乳を売る理由は馬乳酒の販売先の確保が容易でないことや、運搬手段や時間の都合で馬乳酒を出荷できないためであるという。なお、馬乳の買値は500g（1斤）で9元である。上述した馬乳酒の運搬代（燃料代および業者への輸送量）と馬乳の購入費のほかに、目立った経費としては労働者の人件費がある。人件費は月に3500元であり、世帯番号1では搾乳の有無を問わず馬群の管理のために通年で雇用している。

まず粗収入を計算すると、 $10\text{元} \times 200\text{斤} \times 120\text{日} = 24\text{万円}$ である。一方、支出はアバガ旗までの輸送費が500g（1斤）で1元なので2.4万円、シリンホト市中心部への往復（120km）のガソリン代は平均燃費を1ℓ

<sup>18)</sup> 双方を単純に円換算すると、モンゴル国では1tで約6万円、内モンゴル自治区では150kgで約6万円となる。

10 km、価格を  $1\ell$  6.23 元<sup>19)</sup> で 120 日分と計算すると  $6.23 \text{ 元} \times 12\ell \times 120 \text{ 日} = 8971.2 \text{ 元}$  となる。また人件費は  $3500 \text{ 元} \times 12 \text{ か月} = 4.2 \text{ 万元}$ 、馬乳の購入費は  $9 \text{ 元} \times 80 \text{ 斤} \times 120 \text{ 日} = 86400 \text{ 元}$  となる。粗収入からこうした支出を差し引くと、78628.8 元が純収入となる。なお世帯番号 1 の主人は、馬乳酒は 1 日 600 元くらいの純収入をもたらすと語っており、この試算 ( $78628.8 \div 120 = 655.24 \text{ 元}$ ) はインタビューのデータとも大きな祖語はない。また彼らの収入は半分がこの馬乳酒から、半分が家畜（ヒツジ 300 頭、ウマ 70 頭所有）の生体販売からもたらされるとのことであったが、年間の純収入が 15 万元を超える世帯は、現地の牧民としては比較的裕福な部類であるという。彼らが馬乳酒の販売で収入を倍増させているという事実が、馬乳酒販売の重要性を如実に示していると言えよう。

他の牧民においても馬乳酒の主な売却先は世帯番号 1 と同様、都市部の乳製品店であると回答していた。乳製品店と牧民との間にはある程度固定的な関係が存在し、持続的な関係を維持することが志向されている<sup>20)</sup>。無論、場合によっては馴染みのない業者ないしは消費者が生産者の元に直接買い付けに来るケースも存在する。この場合は購入者が知り合いである場合も、そうでない場合もあり、特に親しい友人などの場合は一般の市価より安い価格で売却することもあるという（世帯番号 4）。また乳製品販売店は仕入れた馬乳酒に 500 g（1 斤）あたり 3-5 元程度の利益を乗せて販売するため、消費者にとっては卸値で購入するより安価である。ただし燃料代などを考慮すると、消費者レベルで利益が出るほどの大量購入をするケースは少ないと思われる。例えば尾崎の調査中、世帯番号 2 の店に個人客がテイクアウトで購入したが、購入量は 12.5kg（25 斤）、価格は 500 g（1 斤）15 元であった。これをアバガ旗中心地郊外の牧民世帯まで直接購入に行くと 500 g（1 斤）12 元で購入できるが

<sup>19)</sup> 調査時のシリンホト市でのガソリン価格に基づく。

<sup>20)</sup> 辛嶋はモンゴル国の牧民が肉の売却において知り合いの商人との取引を優先させる傾向を、機会費用の引き下げを目指したものであると指摘している [辛嶋 2010 : 198-206]。内モンゴル自治区においても牧民は取引相手との信頼関係の有無を重視しており [児玉 2000 : 294]、本論で論じた馬乳酒の取引についても同様の傾向として理解できるだろう。



(世帯番号 3、5)、差額 75 元のうちガソリン代で 30-60 元程度必要である(世帯番号 3、5 の場合)ことを考慮すれば価格での説明は難しく、味などの品質や人間関係(例:親族、友人、知人)といった要素が大きいと想像される。

一方、販売先の広がりについても人間関係は欠かせない要素である。世帯番号 1 のフフホトへの出荷先は知人を通じて確保したものであるし、世帯番号 3 は旗中心地に居住していた経歴がある上に漢語も流暢に話すため、個人の買い付けが多いと語っていた。世帯番号 5 は内モンゴル自治区南部のオルドスや東部の通遼などへも馬乳酒を出荷しており、またモンゴル国スフバートル県の知事を迎えた経験などもあるが、妻がシリングル盟の人民代表大会委員であることと無関係ではないと案内人は解説していた。また世帯番号 2 の馬群が夏に放牧されている草原は仲の良い友人から無償で借り受けているとのことであり、旗中心地での馬乳酒バーの経営も人間関係抜きには成立困難であることが示唆される。

もちろん、世帯番号 3 が語るように近年は過当競争気味で馬乳酒の価格が下落気味であることや、馬乳酒の味で生産者が選別されて誰でも売れるわけではないというのも事実だろう。その意味で、すべてが人間関係の論理で構成されていると理解するのも早計である。ただ現時点での解釈として、馬乳酒販売を目的とした大規模生産者になれる条件として、販売先に関する見通しは重要であり、それゆえに誰でも参入できる市場ではなく、結果として地域社会レベルで見れば生産者は少数に限られていると解釈すべきだろう。ただし、参入できる層に限って言えば、馬乳酒販売はやはり郊外でのみ成立する収入源であり、コストに直結するという面で立地が重要となる。

これをモンゴル国の郊外と比較すると、郊外への参入の自由度においてモンゴル国の高さが際立っているが、これは土地制度の違いに由来するものである。馬乳酒の生産規模は内モンゴル自治区と比較して小規模のケースが多く、あまり豊かでない層の現金収入獲得手段という意味合いが強いものと解釈できる。これは一定の資産(例:家畜、現金)や人間関係を持っている内モンゴルの馬乳生産者とは対照的である。またモ



ンゴル国の遠隔地居住者に関して馬乳酒は主たる現金収入の手段とはなっていないものの、売却可能性については内モンゴル自治区より高いと思われる。これは現状では馬乳酒購入者としての都市在住者がモンゴル国に多くマーケットが大きいこと、もしくはナードム時期の需要が極めて大きく零細な郊外の生産者だけでは同時期の供給が追いつかないこと、旧正月前に馬乳酒を売ろうと思えば凍結状態で運べるため夏場より容易に運搬可能であることなどが理由として考えられるが、詳細な検討は今後の課題としたい。

## IX 本論のまとめと今後の展望

本論での主要な論点を簡単に振り返ってみると、以下のように整理できるだろう。

- 1) モンゴル国および内モンゴル自治区で生産されている乳酒は、乳を乳酸菌発酵およびアルコール発酵させた醸造酒と、醸造酒を蒸留した蒸留酒に大別される。
- 2) 前近代における乳酒の生産と消費については、空間的な偏差が大きかった。乳酒は種類を問わず生産された地域で消費されており、交易など流通の対象とはなっていなかった。地域によっては、乳酒は儀礼食としての役割も担っていた。
- 3) 近代以降、モンゴル国においては社会主義体制下で醸造酒の一種である馬乳酒の流通が開始した。その背景には、都市化の進行とともに生産地域外で馬乳酒を購入する人々が出現した点や、農牧業協同組合などの政府組織が流通を担った点が考えられる。
- 4) またモンゴル国においては、近代国家としての文化的均質化の過程で馬乳酒の生産地域が拡大したが、内モンゴル自治区では生産地域の拡大は発生せず、また医薬品などとしての馬乳酒の流通も社会主義体制下では限定的であった。
- 5) モンゴル国では社会主義崩壊後、市場経済の浸透に伴い牧民の郊外化が発生した。地域郊外の牧民にとって、少なくとも馬乳酒を

大量に生産する地域においては、馬乳酒が家畜生体やカシミアと並ぶ重要な収入源となっている一方、遠隔地においても副次的な収入源としてではあるが都市への販売に伴う流通がみられる。

- 6) 内モンゴル自治区においても 1980 年代以降、馬乳酒を都市部へ流通させる牧民が出現し始めたが、本格的な流通は過去 10 年の現象である。生産地域はシリント市とアバガ旗に限定され、その中で都市に近い少数の牧民が販売目的で生産している。
- 7) 内モンゴルにおいては、牧地面積を主要因として郊外および遠隔地の牧畜戦略に二極化しているが、馬乳酒は郊外の富裕な牧民にとっての選択肢の 1 つとして位置付けうる。遠隔地での馬乳酒生産も継続しているが、生産地域が限られるうえ、地域内でもごく少数の牧民が自給的に生産しているのが現状である。

最後に、今後の乳酒の流通の在り方が牧畜戦略、特に遠隔地におけるそれに与える影響についての展望を試みたい。現状では、モンゴル国の遠隔地では注文等に関わる通信および都市への輸送手段がネックとなり醸造酒の出荷は盛んではなく、また理由は不明であるが蒸留酒に関しては社会主義時代も社会主義崩壊後も商業的な流通の対象とはなっていない。前者については、単に自家消費や贈与で消費したものを交易品に転化するだけなので牧畜戦略の在り方に変化を与える可能性は低いが、内モンゴルで指摘したのと同様の嗜好の変化は発生しうる。例えば森永による 2013 年のボルガン県・アルハンガイ県での調査では、地方政府などが主催で実施される「馬乳酒コンテスト」で入賞する馬乳酒として、しばしば低発酵のものが選ばれていたことが観察されている。

これは潜在的に、馬乳酒の生産・流通の在り方に影響を与える可能性がある。場合によっては冷蔵貨物車などで馬乳を都市などの定住地域へ運搬し、そこで馬乳酒を生産し始める可能性がある一方、そうした資本のない生産者が「売る手段がない」という理由で自家生産を最小限に抑える、もしくは生産を取りやめる可能性が中長期的には想像される。そうした場合、特に小規模生産地では牧民による生産がなくなり、馬乳酒生産の空間的な偏差が現在より拡大するだろう。

また仮に蒸留酒が流通の対象となった場合はどうだろう。その場合、影響を受けるのはウシの頭数であろう。例えば、尾崎の調査地であるスフバートル県オンゴン郡（Region I、遠隔地）を例に挙げると、1999年の寒雪害以降、ウシの頭数は減少してヒツジ・ヤギの小家畜に重点がシフトしている。その背景として、ウシは自家消費用の乳製品づくりか肉用に売却されるのみで用途に乏しく、一方のヒツジについては当地がモンゴル国内では美味な肉の産地の一つ<sup>21)</sup> という認識がされており高値で売れ、ヤギはカシミアの現金収入が確保できるので重宝されているという事情がある。無論、こうした社会的条件は他地域にそのまま適用するものではないが、全国的な傾向からもウシの頭数回復は概して緩慢であることから、消費面から見て食生活の重点が乳製品（ウシ）から肉（ヒツジ）へシフトしている可能性がうかがわれる（図8）。蒸留酒が流通対象となれば、遠隔地でウシを増やすという戦略がオプションとして加わる可能性はあるだろう。

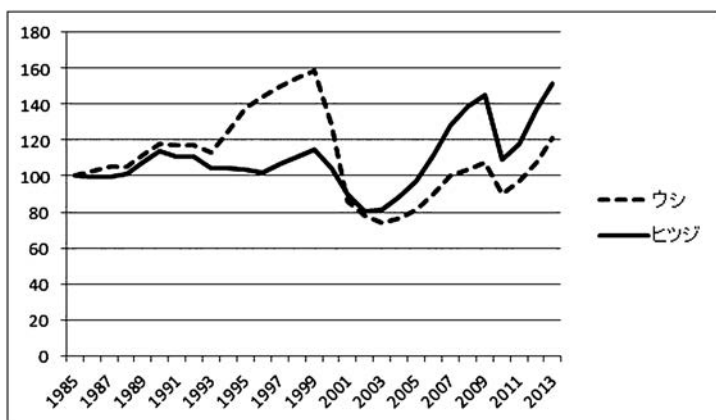


図8 モンゴル国におけるウシとヒツジの頭数変化(1985-2013年)(1985年値=100)  
出典：モンゴル国家統計局資料

<sup>21)</sup> モンゴル国では、一般的に乾燥度の強い地域のヒツジは美味であるとされている。なお近年は、他地域から運んできたヒツジをウランバートル郊外でスフバートル県のナンバーが付いたトラックに積み替えるという一種の産地偽装も行われているという。

一方、内モンゴル自治区ではどうだろう。既に同地では、都市近傍では乳用に特化してウシを飼養する牧民が存在する一方、遠隔地でのウシ飼養は肉用に特化し、仔畜の成長を重視した結果すでに搾乳を停止している牧民も珍しくない。さらに蒸留酒となると、生産者そのものが稀である。牛乳の価格下落に伴い、郊外の牧民が蒸留酒を復活させる可能性が皆無ではないものの、問題は出荷先の確保であり、乳製品店やモンゴル料理店などで蒸留酒を扱ったとして購入者が確保できるかは未知数である。馬乳酒に関しては今後フフホトや中国内地などのマーケットが拡大し、郊外と遠隔地の輸送コストの差が小さくなれば遠隔地の牧民にとっても選択肢として開かれる可能性はある。ただし既にウマが少ない現状<sup>22)</sup>で、牧畜戦略に大きなインパクトを与えうるかは疑問である。

なお、本論では取り上げなかったが、ウマ・ウシと並ぶ大型家畜としてラクダも存在する。1990年代以降、モンゴル高原のラクダは減少しているのが現状であるが、ラクダの乳酒（醸造酒）も薬効があるとして、モンゴル国のゴビ地域からウランバートルへ出荷している事例が存在する<sup>23)</sup>。こうした他家畜の乳酒への研究対象の拡大は今後の課題である。

## 付記

本論は平成27年度科学研究費助成金基盤研究(B)「モンゴルのアイラグ（発酵馬乳）の製造法の地理学的・生態学的検証」（代表：森永由紀）の成果の一部をなすものである。

<sup>22)</sup> 内モンゴル自治区におけるウマの頭数は1975年の239万頭をピークに減少傾向が続いており、2011年には77万頭となっている〔内蒙古自治区統計局(編)2012: 298-299〕。

<sup>23)</sup> 尾崎は2009年8月に、ウムヌゴビ県ハンボグド郡中心地で、ラクダの乳酒を生産する小規模な工場を実見している。ただしここでは、加熱し発酵を止めてレトルト容器に密閉していた。

## 参考文献

- Batoyun, T., D. Erdenetsetseg, M. Shinoda, T.Ozaki and Y. Morinaga  
2015 Who is making airag (Fermented Mare's Milk)?: A nationwide survey on traditional food in Mongolia, *Nomadic Peoples* 19(1) : 7-29.
- 陳潮・陳洪玲(主編)  
2003 『中華人民共和國行政區劃沿革地圖集』中国地圖出版社。
- Эрдэнэсүрэн, Б. ба Бадрах, Ц.  
2013 *Монгол Улсын Хүн Ам Зүйн Түүхэн Товчоо*. BCI.
- 後藤富男  
1968 『内陸アジア遊牧民社会の研究』吉川弘文館。
- 平田昌弘  
2013 『ユーラシア乳文化論』岩波書店。
- 石毛直道  
1997 「モンゴル高原に白いご馳走を訪ねて」石毛直道(編著)『モンゴルの白いご馳走』17-52。
- 石井智美  
2010 「モンゴル遊牧民の職の変容—1 家庭の事例から—」『沙漠研究』19(4) : 537-543。  
2011 「内陸アジアの遊牧民の動物性食品と植物性食品の利用」『酪農学園大学紀要 自然科学編』35(2) : 17-31。
- 上村明  
2002 「馬の搾乳儀礼『ゲーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス』再考—儀礼の政治性と身体性をめぐって」小長谷有紀(編)『北アジアにおける人と動物のあいだ』pp.285-325、東方書店。
- 辛嶋博善  
2010 「機会費用の引き下げ方—モンゴル遊牧民と市場」中野麻衣子・深田淳太郎(編)『人=間の人類学—内的な関心の発展と誤読』、pp.191-209、はる書房。
- 柏原孝久・濱田純一  
1919 『蒙古地誌 下巻』富山房。
- 児玉香葉子  
2000 「現代都市モンゴル族の文化変容と社会経済的動態—中国内モンゴルにおけるある都市民モンゴル家族の暮らしから—」『沙漠研究』10(4) : 287-300。
- 小長谷有紀  
1992 『モンゴル万華鏡 草原の生活文化』角川書店。
- 水谷潤  
1997 「内モンゴル紀行一次調査」石毛直道(編著)『モンゴルの白いご馳走』pp.53-72、チクマ秀版社。
- 内蒙古自治区統計局(編)  
2012 『内蒙古統計年鑑 2012』中国統計出版社。

野沢延行

1991 『モンゴルの馬と遊牧民』 原書房。

小貫雅夫

1985 『遊牧社会の現代』 青木書店。

尾崎孝宏

2008 「モンゴル牧民社会における郊外化現象—ポスト「ポスト社会主義」的牧民の出現に関する試論」高倉浩樹・佐々木史郎(編)『ポスト社会主義人類学の射程 (国立民族学博物館調査報告 78)』 pp.481-499、国立民族学博物館。

2011 「内モンゴル牧畜における土地利用の現状—四子王旗、農牧境界地域の事例」『人文学科論集』 73: 1-25。

2013 「自然環境利用としての土地制度に起因する牧畜戦略の多様性」『沙漠研究』 23(3): 111-118。

高倉浩樹

2012 『極北の牧畜民サハ—進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌』 昭和堂。

梅棹忠夫

1990(1952) 「モンゴルの飲みものについて」『梅棹忠夫著作集 第2巻 モンゴル研究』 pp.353-379、中央公論社 (初出:ユーラシア学会(編)『遊牧民族の社会と文化—ユーラシア学会研究報告』 177-200)。

Vreeland, H. H.

1953 *Mongol Community and Kinship Structure*, New Haven: HRAF.

